

風土を温める あたた

シリーズ 高山の文化財

【国指定文化財】

浅鉢形土器 あさばちがたどき

昭和五十七年五月二十八日午前九時ころ、土の薄いかけらがポロッとはがれると、そこからは鮮やかな桃色をした不思議な土器が顔を出しました。土の固まりをていねいに取り除くと、三角とS字文様の見たこともない土器の姿が現れ、発掘現場は騒然となりました。場所は片野町一

丁目（糠塚）にある「片野糠塚遺跡」です。第一号住居址という縄文前期後半（約六千年前）の床から発見されました。

この場所は、片野町と江名子町にまたがり、後ろには標高一〇二七メートルの大西山が控え、北西に広がる扇状地となっています。久々野町へ



真上から撮影

真下(底)から撮影

浅鉢形土器(大・小)

通ずる古道「牛方道」があり、古くは久々野と高山を結ぶ最短の道として往來がありました。糠塚遺跡はずいぶん前から知られており、明治二十八年には東京大学人類学教室の田中正太郎（高山出身）が、昭和九年には江馬修が発掘するなど、考古学の研究が盛んな遺跡でした。昭和五十



出土した状況

七年、土地改良総合整備事業で田畑が整備されるのに先立ち、調査が行われました。

出土した土器は、偏平な円盤状で、

底は三段になっています。土器表面には赤い色が塗っており、火熱を受けて黒色に変化しているところもありました。口のまわりには、合計四十個の孔があげられ、その用途が何であったかについては諸説があり、種子貯蔵、酒などの醸造容器、太鼓説などいろいろな想像がなされています。

また、文様は蛇の形、あるいは木の葉模様、人組文ともいわれ、六千年前からこのような幾何学文様があったことは注目に値します。この土器様式は「関東諸磯b式」という様式で、現在の関東地方からはるばる飛驒まで文化が伝わってきたことが分かります。

同じ住居の跡から、もう一つ別の土器が出土しました。こちらは少し小ぶりで文様が全くないものの、形は底が三段になっていて、大きい方と全く同じです。発見された状況は、大小の浅鉢が並んでいて（出土状況写真）、しかも床に置かれてから盛大な焚火が行われたようです。土器の中にたくさん炭が詰まっていたが、おそらく住居を廃棄するときに、祭祀が行われたものと思われるます。

この二つの土器は、縄文時代前期後半における関東系の異質な土器で、全形が知られる数少ない土器として、昭和六十三年、国の重要文化財に指定されました。

所有者 高山市

展示場所 市郷土館

時代 縄文時代

寸法

大 高さ九・二cm、口径二一・五

cm、胴径三五・〇cm

小 高さ六・八cm、口径二一・三

cm、胴径二〇・八cm

【見学】市郷土館受付へ

入館料 大人三〇〇円、小中学

生 一五〇円（市民無料）